

ラグビー未観戦者の試合観戦前後でのイメージの変化について

The Change of Image among Spectators Attending a Rugby Football Game for the First Time

1K09B063

指導教員 主査 松岡宏高 先生

城戸 太一

副査 石井昌幸 先生

【諸言】

ラグビーフットボール（以下ラグビー）は 19 世紀にイギリスで生まれたスポーツである。起源には諸説あるが、ラグビー校のエリス少年がサッカーの「ボールを手で持てはいけない」というルールを破ったことからラグビーが生まれたという説が有名である。ラグビー発祥の地であるイギリスでは当時、パブリックスクールにおいて紳士育成の手段としてラグビーが行われた。

その後、ラグビーは次第に世界に広まり、1987 年には第 1 回ラグビーワールドカップが開催された。大会の規模は次第に拡大し、2007 年のフランス大会においては、予選から含めた参加国数が 94 カ国、総観客数が 225 万人、テレビでの総視聴者数が 42 億人であった。スタジアムでの観戦者が 225 万人という数字は非常に高いものであると言える。

そして 2019 年に、ラグビーワールドカップが日本で開催されることが決定した。しかし、日本でのラグビーの人気は衰退の傾向にある。かつて 6 万人以上の観客を集めたラグビーの早明戦も、昨年度はピークの半数程度のおよそ 3 万人となった。大学選手権の決勝戦は実数計測が行われるようになって以降、最少の観客数となった。社会人チームが争うジャパンラグビートップリーグも様々な集客戦略を行っているが、観客数は減少している。

そうした状況の中で、日本ラグビーフットボール協会は新たな集客戦略のターゲットとして、スポーツに関心がある層を挙げている。今後観戦者数を増やしていく上で、この層に対する研究が必要である。そこで本研究では、スポーツに関心がありながらもラグビーをスタジアムで観戦したことがない人々を対象に、観戦の前後でラグビーのイメージがどのように変化するのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査対象者は、日常的に大学でスポーツについて学んでおり、スポーツに対しての関心が比較的高いと思われる早稲田大学スポーツ科学部の学部生とした。

調査の方法は半構造化インタビューを用い、質的調査の方法をとった。インタビューは試合観戦の前後に行い、ラグビーに対してのイメージに関する質問を中心に、話題の展開の中で適宜質問を加えたり、質問の順番を変えたりした。インタビューは 6 名の学部生に対して、2012 年 11 月 23 日に行った。

【結果】

試合前のインタビューでは、6 名中 4 名がラグビーのイメージで思い浮かぶものとして「ぶつかり合い」というイメージを挙げた。特にラグビーの観戦経験のない 2 名においては、それ以外プレーのイメージが挙げられなかった。一方、テレビで観戦したことがある 2 名はぶつかり合い以外のプレーのイメージも挙げた。それらは「走る」「キック」であった。

またプレーしている人に対するイメージに関して最も多かったのが「大きい」という回答であった。「小さい人もいる」と答えた対象者はテレビでの観戦経験がある、またはラグビー競技者の友人がいる者であった。

試合後のインタビューでは 6 名共通で「イメージしたよりも、迫力があつた」と答えた。試合観戦中の選手の声や選手同士が接触した時の音などが要因となっていた。また、このことで、より「ぶつかり合い」というイメージを強くした者もいた。

「ぶつかり合い」という印象がある一方で、「イメージよりも技術や戦術があつた」と答えた対象者が 5 名存在した。これはキックやラン、パス回しなどのプレーが要因であった。

イメージの変化に関しては以上のようにあり、試合前のイメージには無かったプレーが印象に残った対象者がおり、魅力に感じたという回答した。

【考察】

イメージの変化について、「ぶつかり合い」というイメージから選択肢の広いスポーツというイメージに変わった対象者が 4 名存在した。そして少なくともそれは面白いと捉えられ、魅力として感じていた。

しかし、試合前のイメージでは、その魅力として感じられる部分のイメージが少なかった。魅力として受け入れられる部分を知らずに、ラグビーに興味を持つに至らない状態は非常に惜しいことである。今後観戦者を増加させるために、こうしたラグビーの多様な魅力を伝えていく努力が必要であると言える。

また本研究では質的調査ということで、サンプル数は 6 名と非常に少ない。当然人によって全く異なるイメージを持っているということも考えられ、今後さらなる研究が必要である。